

# 自立した主権者 をめざして

▶ ▶ ▶ Vol.36 無自覚の差別

## KEYPOINT

- あなたは社会的な課題について日ごろ考えていますか？
- また、考えていることについてどんな活動をしていますか？

## SUMMARY

誰かを傷つけたり、誹謗中傷したりすることは明らかな差別です。目に見える差別は抗議する、という行動を起こすことができますが、言っている本人も無意識である場合はどうしたらよいでしょうか。この「無意識」にもつ固定概念を自分で認識することで、少しずつ差別をなくすということができるともいえます。

## お知らせ

(10月1日発行)1面論文について、構成や流れや受け止め方等をコメントする場を YouTube チャンネルで配信しています。毎月配信しますので ニュースと併せてご視聴ください。



## マイクロアグレッションは誰でも行う

「マイクロアグレッション」という概念があります。これは、無意識の偏見や差別によって、悪意なく誰かを傷つけることを指すことです。もう少し詳しく言うと、「口にした本人に“誰かを差別したり、傷つけたりする意図”があるないに関わらず、対象になった相手を軽視したり馬鹿にするような否定的なメッセージを感じるため、受け手の心にダメージを与える言動」です。例えば、「女のくせに出世して態度がでかい」と言われれば、差別だとはっきり感じますが、「女性なのにそんなに出世して偉いね」と言われると、一瞬褒められた気がするけれどモヤっとする、こんな感じの言葉です。言葉の他にも、体格が良い人に「もっと食べられるでしょう？」と言ったりすることもこれにあたります。「韓国の人みんな辛い物が大丈夫だと思っていた」や、「やっぱりゲイの人って芸術家だよ」「男の人なのにスイーツ好きなんだ」など、本人は何気ない会話のつもりなのに、相手を時に深く傷つけてしまうことは、私達の周囲にもありますし、私たち自身も誰かに言ってしまうことがあると思われま

す。分かっていてのために抗議がしにくく、言った側が問題だと気づきにくい問題です。このマイクロアグレッションは特にその人の出自・属性に関することや、自分で選択したり、変えたりできないものに対して発生するケースが多いという特徴があり、ジェノサイドやヘイトスピーチを下支えしている、最下層にあるものがマイクロアグレッションだといわれています。

差別は、『自分が有利になりたい、偉くなりたい（自尊心や自己肯定感）』という心理から生まれると言われます。たとえば、自己肯定感が低い人が、違うタイプの人をけなして、自分のほうが上だと思ふことで、相対的に自己肯定感を補うのが一般的ものです。また、人は味方と敵を分ける心理が働くため、「同じ性質である集団、属している集団に身を置いて安心したい」という防衛本能的な気持ちから、自分と異なる肌の色や言語、振る舞いの違いに違和感を持つことになります。自分たちが社会の中で『普通』の存在だと考えること、つまり偏見や差別を持つ側がマジョリティーであることに安堵感を抱きながら日々生活していく中で、障害者問題、ジェンダー問題、人種、民族差別の問題が起こっているのです。

## マジョリティは正義という概念からの脱却

話をマイクロアグレッションに戻します。たとえ指摘できなくても差別された側が何となく落ち着かないことがあるというのは「攻撃」をされたときです。しかしそこに、「支援」や「保護」と

という言葉がついてきたら、どうでしょうか。  
LGBT 理解増進法の「理解」や、男女雇用機会均等法の「均等」という言葉から差別感を感じられません。しかし実際はどうでしょうか。例えば LGBT 理解増進法では、理解を広げるための法律のはずが、「全ての国民が安心して生活できるよう留意する」という規定のために、多数派の安心や家庭、地域住民の協力といった点を口実に理解を広げることを妨げ、性的マイノリティの人々を苦しめ、追い詰め、命を見捨てていくことにつながったりする可能性がある」と指摘されています。先日埼玉で問題になった児童虐待禁止条例についても、「こどもの虐待をなくす」という目的のため「子どもだけの登下校や外遊び」「子どもだけの留守番」すべてが虐待と定義されたうえに通報の義務が課され、保護者からの批判の声によって取り下げとなりました。子どもと四六時中一緒にいるということは、誰かが必ず家にいてなおかつ子どものことだけに関わることができる状況でなければなりません。その対象は「女性」であり、女性は家庭にいるべきという男性が持ちやすい概念が思い浮かびます。これは女性に対する差別の他、家事労働への軽視や、疾病や介護という別の問題への無配慮も生じました。さらには、子どもたちの意見を聞くという、子どもの権利条約も念頭になかったことが明らかです。上記は一例でしかありません。社会でまかり通る「普通＝マジョリティ」という固定概念が、意識せずとも上下関係をつくっているのです。  
マジョリティ（と思っている）人たちは、自分

たちの管理下にあるうちは、マイノリティの人たちに対して寛容です。フルタイムで働く女性が頑張っって社内での地位をあげていくとき、自分よりも下の階級の時は「これからは女性の時代だ、がんばってほしい」などと言っている男性が、自分よりも地位が高くなった途端に「女には任せられない、これだから女は」と攻撃をすることがあるのは、無意識に「女性は男性よりも格下である」という概念があるからです。

若者の意見を聴こうと言いながら、主導権を渡さないことは、「若い人は仕事ができない」から自分たち年長者が「指導」しなければならないという概念から起こります。

人の心に差別心が生じること自体は避けることはできません。しかしそれを外に出さない、それを理由に他者を排除したり、不当に扱わない、つまり「自分の中に差別心があることを自覚する」。ことから、はじめることしかできないのです

#### 〈機関紙「日本再生」No.533の内容〉

2023/10/01 発行

「いのちとくらし、人権」の視点から「あきらめるわけにはいかない」という主体的意志を育むために●3-9面/コラム/一灯照隅●9-17面/困む会 in 京都/脱炭素社会への公正な移行/諸富徹・京都大学教授●17-20面/インタビュー/野党の可能性/山本健太郎・北海学園大学教授●20-24面/インタビュー/高等教育進学率 80%時代の教育費負担とは/大内裕和・武蔵大学教授※ 機関紙「日本再生」のご購読をご希望の方は下記の連絡先までご連絡ください。

一緒に  
考えてほしいこと

- ・あなたは自分の中の「無意識の差別」に気付いたことはありますか？
- ・無意識の差別に気付いたとき、あなたはどのように対処しますか？

【連絡先】「がんばろう、日本！国民協議会」埼玉読者会

住所：埼玉県越谷市大里 226-1 白川ひでつぐ事務所

担当：吉田理子

ganbarou.r.a.saitama@gmail.com

がんばろう、日本！HP 埼玉読者会 note



がんばろう、日本！国民協議会は、「国民主権の発展」「人づくり」「がんばる日本と日本人を回復する国民運動」「自由・民主」東アジアの社会的リーダー層のネットワーク構築および日米同盟の再定義」を目的として活動している団体です。機関紙「日本再生」および各種資料の発行や、例会、定例講演会などの開催、また国民的課題、地域的課題への取り組みなどを行っています。